



安部公房

愛の眼鏡は色ガラス

新潮社

書下ろし新潮劇場

書下ろし新潮劇場

あ べ こう ぼう  
安 部 公 房

あい め がね いろ  
愛の眼鏡は色ガラス

昭和48年5月15日発行／昭和48年6月10日2刷

発行者■佐藤亮一／発行所■株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京808

印刷■株式会社金羊社／製本■神田加藤製本

©1973, Kōbō Abe, Printed in Japan

落丁本はお取替えいたします

定価 550 円



# 眼鏡は色ガラス

三十二景

〔登場人物〕

男

女 A

女 B

白医者

赤医者

旅仕度の男

外交員

首吊り男

オレンジ・ヘルメットの学生

グリーン・ヘルメットの学生

縞・ヘルメットの学生（女）

看護人

病院の大広間。九つのドアが並んでいる。一隅にピンポン台。不規則にちらちらしている、九つの椅子。

男が、椅子の一つに裸のゴム人形を掛けさせ、布でその体をぬぐってやっている。やや距離をおいて、その様子をうかがっている、赤い白衣の医者（赤医者）。

赤医者（見かねた感じで、首を左右にふり）見ちゃいけないね、毎度のことながら……

男 何が？

赤医者（多少おどけ気味に）大胆といおうか、思い切りがいいと言おうか……とにかく君も、相当な変り者さ。

男 そうですか？

赤医者 そうさ。

男 なぜ？

赤医者 だって君、そんなふうに、自分の女房の裸を、ひと前に平気でさらすだ

なんて……

男 (手を休め、赤医者を振向いて) 女房？

赤医者 ちがったつけ？

男 ただのゴム人形ですよ、これは……

赤医者 そうそう、もちろん、ゴム人形さ。

男 ゴム人形が、どうやって女房になれるんです？

赤医者 (赤いレンズ入りの眼鏡を取出して掛けながら) いやいや、ぼくの勘違いだったらしい。

男 (軽い溜息。立上って、ゴム人形を見まわす) なにか、おかしいのかな、おれにしてること……

赤医者 (さりげなく、話題をそらせ) 君、今朝の新聞みた？ ひどいねえ、あの記事

……ほら、なんとかっていう、あの……

男 (ゴム人形に、かつらをかぶせてやる) 率直に指摘してもらった方がいいな。ちょっとでも、おかしい素振りが見えるようなら……

赤医者 勘繰っちゃいけない。君自身、ゴム人形は、ゴム人形だと、ちゃんとした自覚もあるんだし……

男 しかし、何か、先生に疑いを抱かせるような点があったらしいね。

赤医者 ただの錯覚だったら。

男 そうかな？

赤医者 きまつてるじゃないか。

男 自分でも、ゴム人形をゴム人形だと識別できるあいだは、まだ大丈夫なんだ  
とと思っていますがね。

赤医者 君の正気は、ぼくが請け合うよ。

男 でも、疑われたことも事実なんだから…… (弱々しく笑う)

赤医者 君があんまり、かまいすぎるからさ。

男 (ゴム人形に、ガウンをかけてやる) かまっているのは、ぼくじゃない。ぼくの方で、

かまわれているんですよ、最初っから……

赤医者 そうそう、そうだったね。

男 夜中に、ドアの向うで、ごそごそ這いまわったり……

赤医者 そうそう、いかれてるのは、この人形の方だったっけね。(乾いた短い笑い)

男 ベッドに、連れて行ってもらえますか。先生の言うことなら、素直に聞くよ  
うだから……

赤医者 いいとも。(気兼ねしながら、ゴム人形をかかえ上げる) さ、行こう……人形らしく、大人しくして……夢なんかみないで、ぐっすり睡らなけりや……

赤医者、いちど振向いてぎこちない笑いを残し、ドアから退場。

男 やれやれ、気違いのお相手も楽じゃないよ……

ちょっとした、ためらいの後、男、しのび足でドアに向い、耳を押し当てて中の  
気配をうかがう。

2

ドア3から、女Aが登場。大きな白い箱をかかえている。すぐついで、白衣の医者（白医者）が登場する。男、あわててドア5から離れる。

白医者 おねがいだよ、ねえ君、おねがいだから……

女A（男に気付いて）奥さんの具合、どう？

男 べつに。ちょっと風邪気味なだけさ。

女A いやな風邪が流行ってるらしいわ。

男 気候の変り目だからね。

白医者 いい加減にしてくれよ。そんなことで、ぼくがだまされると思うの？

なにが奥さんだい。ただのゴム人形じゃないか。君たちだって、ちゃんと承知しているくせに……

男 誰が、ゴム人形だった？

白医者（苛立って）なぜ、ぼくをそう信用しないんだ。ぼくをだまして、なんの得があるってんだい。わけが分らんよ。

女A だって、面白いのよ、先生が興奮すると。

白医者 言っときますが、ぼくがその気になれば、強制退院させることだって出来るんだからね。

女A 先生、もちろん正気よね？

白医者 きまつてるじゃないか。

女A じゃ、もっと静かにしてほしいな。よけいに、正気嫌いになっちゃうじゃないの。

男（椅子の一つに、ぐったりと掛け）受取った指令書には、ある家をたずねるように指示されていた。その家をたずねると、また別の指令書を渡された。その指令書も、さらに別の家を指示していた。指示どおりに家をたずねてると……

女A（男の椅子の隣に掛け）再び指令書を手渡された。

男、反射的に腰を上げ、別の椅子を探して逡巡する。女A、からかうような笑い声をたてる。

白医者（女Aに）　くどいようだけど、君、君はいますぐにでも退院すべきなんだ。こんな所にいたら、かえって悪化する。もう、ほとんど、完全に正気なんだから……

女A　最初っから正気よ、私は……

白医者　だから、よけいにさ……

女A　ここが気に入ってるの。

白医者　弱ったな……精神病にも、一種の、伝染力があって……よくないんだよ……

女A　正気って、そんなにいい事なのかな？

白医者（離れた椅子に腰を下ろしかけた男に呼びかけて）君、加勢してくれよ、君だって、正気なんだろ、だったら……

ドアから、旅仕度の男が姿を現わす。登山を思わせる重装備だ。男、ぎょっとしたように立上る。女Aもつい腰を上げる。

女A（強い好奇心を示し）どこに行くの？

旅仕度の男（曖昧な微笑を浮かべ）どこって、べつに……

白医者 嫌がらせかい！

旅仕度の男（表情をこわばらせ）まさか……

女A、箱から何かを取出し、こっそり男の椅子にすべり込ませる。

男（不安とも期待ともつかぬ緊張）しかし、君、まさか……

旅仕度の男（強く手を左右に振って）まさか！

男 だろうな……

旅仕度の男 (はるか過ぎ去った日々を思い起す感じで) よかったなあ…… (指先で宙にその

過去を描き出そうとする仕種)

男 もう手後れかい? そう思うのかい?

旅仕度の男 (防禦の表情で、強く) まさか!

女 A それ、寝袋?

旅仕度の男 うん、もちろん一人用のだけだね。

白医者 (腹立たしげに) いいよ、行きなさいよ、さっさと、行っちゃえよ!

旅仕度の男 (困惑して) 何処に?

白医者 知ったことかい。行きたい所に行きゃいいだろ! あんたにもそろそろ

出て行ってもらおうかと思っていたんだ。おかげで手間がはぶけるよ。

旅仕度の男 (振向いて不安気にドアを探す) ぼく、今、どのドアから来たんだった  
け?

男 右から三つめだろ。

女 A ちがう、6よ。

男 7 だったら。

旅仕度の男 いいんだよ、大体で……（そそくさと、ドア 6 から退場する）

4

女 A の関心は、再び男が椅子に掛ける瞬間への期待に集中する。だが、男はさっさと別の椅子に掛けてしまう。女 A、落胆の表情で、その何かを取上げ、こっそり箱の中にもどす。

白医者 最近、どうもおかしいよ、どいつも、こいつも……

男 やはり、そう感じますか？

白医者 みんなして、さからっているんだろう？

男 さあね……

白医者 じゃ、なんだってんだい！

男（おだやかに）先生も、世間を赤眼鏡で眺めるくらいのゆとりが欲しいとこだ

な。

女A、赤眼鏡を一つ、すばやく箱から取出して、白医者に差出す。白医者、ひったくって床に叩きつけ、ヒステリックに踏みにじる。

女A（淡々と男に）先生の来月分の月給から引いてもらえばいいわ。（白医者に）ねえ先生、どんなに上手に氣違いのふりをしてみても、正常だったら、絶対に見破れるものかしら？

白医者（かろうじて自制し）見抜けない場合だってあるさ。たとえば、相手が医者者だったりしたらね……

女A、面白そうに笑う。次の瞬間、無関心に戻って箱の側面の穴をのぞき込む。男、ふと立上る。無言のまま、ドア1から退場――

白医者 男を見送って舌打ち。女Aの箱のぞきに割込もうとして、そのまわりを一周する。

白医者 (がらりと下手に出て) こういう言い方、お節介すぎると思うし……なんていうか……まるつきり、かたなしだったこと、百も承知で……分る？ 職業的な立場をはなれて……ね……

女A (箱の穴をのぞきつつけ) 何が見えると思う？

白医者 (無視して) たとえば、今の男のことだって……君、どう思ってるの、遠慮のないところ……

女A もちろん、正気なんですよ。

白医者 たしかに、彼の場合、例外的にカルテがない。それというのも、最初は